命はどこにあるのか　ルカ 12:13-21	2024.10.6、丘の上　NO.735 春日部福音自由教会　山田豊

「愚かな金持ち」と言われるたとえ話は、ご存じの方も多いと思います。また、人のいのちは財産にあるのではないということは、イエス様に言われるまでもなくわかっているよ、というような声が聞こえてきそうです。そして、どん欲に注意しなさいとの勧告も当然である、と皆さん思っておられることでしょう。

大変わかりやすいたとえ話なのですが、この話の発端は、イエス様に兄弟の遺産相続の調停人になってほしい、ということでした。親が死んだ途端に、仲の良かった兄弟姉妹が骨肉の争いを始めるということは、昔も今も変わらないようです。その争いが殺人事件ともなれば、小説やホラームービーのテーマにもなりそうなものです。

わかっていても、その罠から抜けられない、本書で言えば、気づかないうちに欲望の奴隷となってしまうことが実際にあるのです。ヨハネは次のように書いています。

15 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。(1 ヨハネ 2:15-17)

カギとなるのは、21 節の「**自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。**」との言葉です。たとえ話の男は、自分のために富んでいても、神に対して富むことはなかった、神無き富に命はないのです。富や財産そのものが悪いのはありません。人の手の中にある富や財産を、神のために生かすこと、具体的には人の命を助けるために生かすこと、これが神の前に富むということの一つの表れでしょう。例えば、あなたが悲しみの中にある人を訪ね、小さな花束を置いてくるなら、その人に慰めを与えることができるでしょう。それが、命です。もちろん、多くのお金を教会の事業のために捧げることも、命でしょう。自分の栄光のためではなく、神のためにするわざこそが、命の証しなのです。

しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。ヨハネ 4:14

引用聖句

1ヨハネ 2:15-17　あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

コロサイ　1:12　また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることができますように。

ヨハネ 1:14　ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

ヨハネ　14:6　イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

ヨハネ　4:14　しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。

使徒20:32　今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。

米百俵

幕末維新の風雲は、戊辰戦争で長岡城下にも及んだ。長岡藩は、軍事総督・河井継之助の指揮のもと、奥羽越列藩同盟に加盟し、新政府軍と徹底的な戦闘を行った。このことは、司馬遼太郎の歴史小説「峠」で広く紹介されている。その結果、250 年あまりをかけて築き上げた城下町長岡は焼け野原となり、石高は 7 万 4 千石から 2 万 4 千石に減らされた。

幕末に江戸遊学をし、佐久間象山の門下生であった小林虎三郎は、独自の世界観を持ち、「興学私議」という教育論を著していた。戊辰戦争の開戦に際しては、長岡藩が参戦することに反対の立場をとっていた。敗戦後、文武総督に推挙された虎三郎は、見渡すかぎりの焼け野原のなかで、「時勢に遅れないよう、時代の要請にこたえられる学問や芸術を教え、すぐれた人材を育成しよう」という理想を掲げ、その実現に向けて動き出した。明治 2 年(1869)5 月 1 日、戦火を免れた四郎丸村(現長岡市四郎丸)の昌福寺の本堂を借りて国漢学校を開校し、子どもたちに「素読」(論語などの読み方)を教えた。翌年 5 月、長岡藩の窮状を知った支藩の三根山藩(現新潟市西蒲区峰岡)から米百俵が見舞いとして贈られてきた。藩士たちは、これで一息つけると喜んだ。食べるものにも事欠く藩士た

ちにとっては、のどから手が出るような米であった。しかし、藩の大参事小林虎三郎は、この百俵の米は文武両道に必要な書籍、器具の購入にあてるとして米百俵を売却し、その代金を国漢学校の資金に注ぎ込んだ。こうして、明治 3 年 6 月 15 日、国漢学校の新校舎が坂之上町（現大手通 2 丁目）に開校した。

国漢学校には洋学局、医学局も設置され、さらに藩士の子弟だけでなく町民や農民の子どもも入学を許可された。また、小林虎三郎の教育方針が貫かれ、生徒一人一人の才能をのばし、情操を高める教育がなされた。ここに長岡の近代教育の基礎が築かれ、後年、東京帝国大学総長の小野塚喜平次、解剖学の医学博士の小金井良精、司法大臣の小原直、海軍の山本五十六元帥などの、新生日本を背負う多くの人物が輩出された。（ゆかりの偉人・先人）

この国漢学校は現市立阪之上小学校に引き継がれ、「米百俵」の精神は長岡市のまちづくりの指針や人材教育の理念となって今日に至っている。（長岡市）